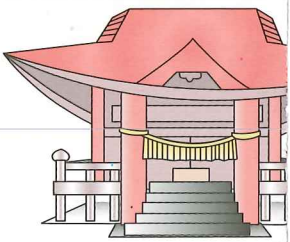
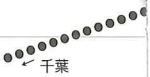
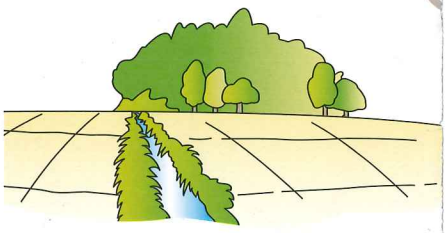
佐倉IC、JR佐倉駅、佐倉の表玄関

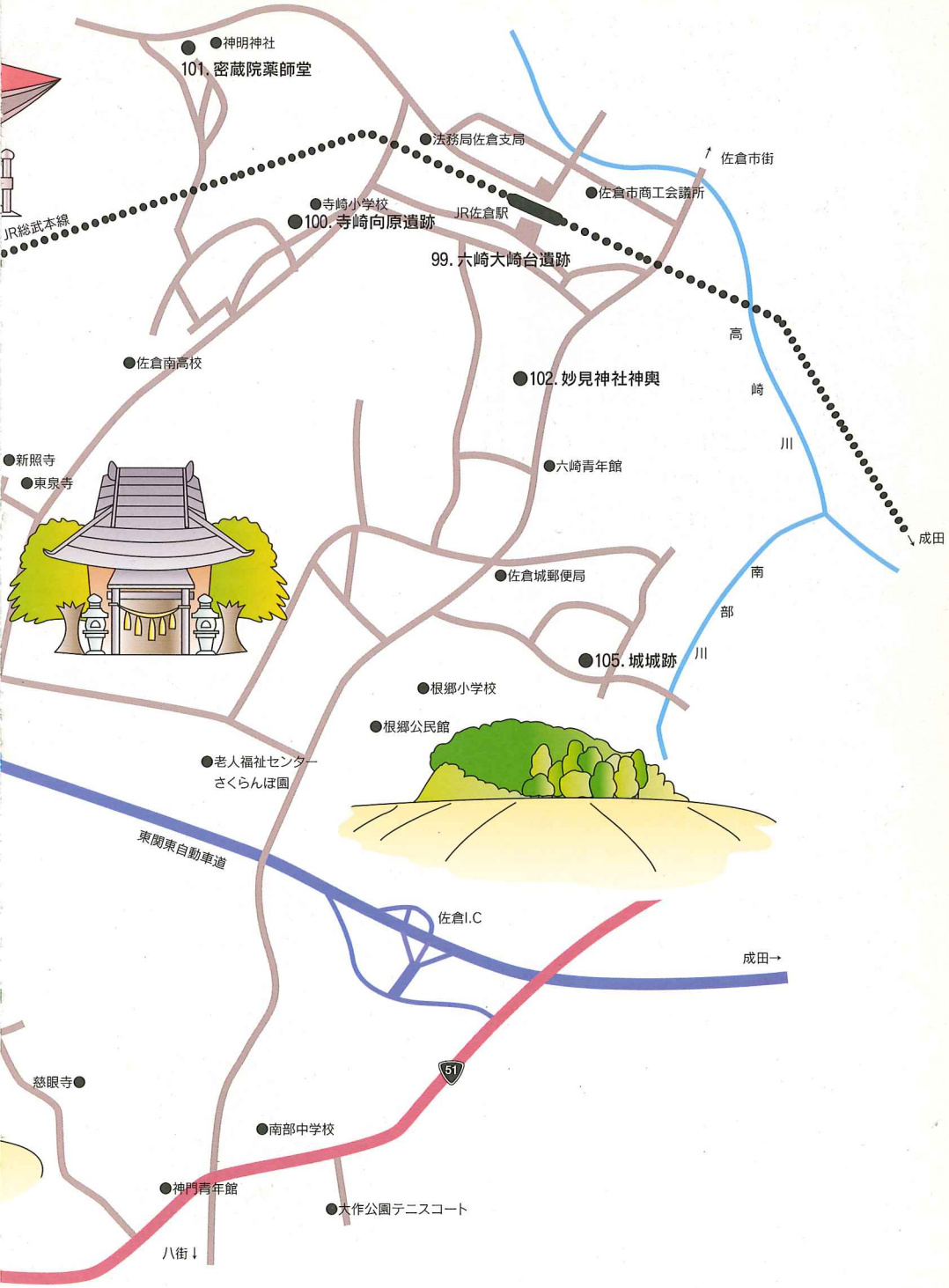
【根郷地区】

99. 六崎大崎台遺跡（六崎）……96
100. 寺崎向原遺跡（寺崎）……96
101. 密蔵院薬師堂（寺崎）……97
102. 妙見神社神輿（六崎）……97
103. 太田権現（太田）……98
104. 熊野神社板絵馬「龍図」（太田）…98
105. 城城跡（城）……99
106. 小篠塚城跡（小篠塚）……99
107. 上人塚古墳（小篠塚）……100








●神明神社
101. 密蔵院薬師堂
●法務局佐倉支局
佐倉市街
●佐倉市商工会議所
JR総武本線
●寺崎小学校
●100. 寺崎向原遺跡
JR佐倉駅
99. 六崎大崎台遺跡
高
崎
川
●佐倉南高校
●102. 妙見神社神輿
●新照寺
●東泉寺
●六崎青年館
成田
●佐倉城郵便局
南
部
川
●105. 城城跡
●根郷小学校
●根郷公民館
●老人福祉センター
さくらんぼ園
東関東自動車道
佐倉I.C
成田→
51
慈眼寺●
●南部中学校
●神門青年館
●大作公園テニスコート
八街↓

99

むつざきおおさきだいいせき
六崎大崎台遺跡

ＪＲ佐倉駅の南西に、かって工業団地から佐倉駅方面へ伸びる台地があり、その平坦部に六崎大崎台遺跡は広がっていました。現在の大崎台３丁目の住宅団地周辺にあたります。佐倉駅南土地区画整理に伴い昭和54年(1979)から発掘調査が実施され、縄文時代早期の炉穴(ろけつ)26基、弥生時代の方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)18基、古墳時代前期の方形周溝墓６基、縄文時代から奈良平安時代の竪穴住居跡(たてあなじゅうきょ)595軒、奈良平安時代の掘立柱建物跡(ほったてばしらたてものあと)72棟などが発見され、縄文時代から平安時代の間に人々の生活が断続的に営まれていたようです。

弥生時代中期には、竪穴住居跡群を取り囲むように溝が掘られた環濠(かんごう)集落が形成されていました。環濠は直径約140mの不整円形を呈し、その内外には同時期の竪穴住居跡156軒と方形周溝墓7軒が検出されました。環濠は外からの侵入に備えて掘られたものであり、その当時集落間の争いがあったことを物語っています。

100

てらさきむかいはらいせき
寺崎向原遺跡

現在の寺崎小学校の南西に広がっていた遺跡で、弥生時代後期から奈良平安時代まで断続的に集落が営まれていたようです。また、弥生時代中期には、東の台地上に広がっていた六崎大崎台遺跡の集落に対応するように、寺崎小学校の南隣の周辺に方形周溝墓が多数造られていました。

宅地造成に先立って行われた昭和55年（1980）から昭和57年（1982）にわたる発掘調査では、弥生時代中期の方形周溝墓43基、弥生時代後期の竪穴住居跡52軒、古墳時代から奈良平安時代の竪穴住居跡88軒、奈良平安時代の掘立柱建物跡121棟、前方後円墳１基、円墳１基などが発見されました。

現在、遺跡の大部分は大崎台４丁目の住宅団地と姿を変えていますが、JRのトンネル上の台地上に遺跡の一部が残っています

101

みつぞういんやくしどう
密蔵院薬師堂

寺崎にある日光山密蔵院は、阿弥陀如来を本尊とする真言宗豊山派の寺院です。鏑木町の大聖院の末寺でした。境内の高台にあり、寛永年間（1624～44）に鹿島川の薬師淵に漂着していたのを引き上げたとされる薬師瑠璃光如来を安置している堂が薬師堂です。

薬師堂は三間四面、正面に一間の向拝（階段の上に張り出した庇）の付いた建物で、現在鉄板葺きに改修されている入母屋造の屋根は、本来草葺きでした。

建築年代は明らかではありませんが、各部に付けられた彫刻や、若葉や波の文様を彫り込んだ虹梁（やや反りをもたせた梁の一種）などの技法の特徴により、18世紀初頭（宝永年間、1704～11頃）に建てられたと推測されます。

薬師堂はこの時期の仏堂としては様式や技法が整っており、彫刻などの装飾も充実したもので、破損も少なく、建築当時の状態をよく残しているものと考えられます。

102

みょうけんじんじゃみこし
妙見神社神輿

現在、六崎の妙見神社に納められているこの神輿は、もとは鏑木町の麻賀多神社に伝わった古い神輿です。

『古今佐倉真佐子』によれば、享保6年（1721）に麻賀多神社で神輿を新造した際に、古い神輿はおよそ60両ばかりで、六崎村の氏子に譲られました。こちらは新造のものよりひとまわり小さく、台輪が方1.28m、屋蓋が方1.44m、高さが1.60mです。

神輿には寛文13年（1673）の銘があり、江戸時代中期以前に造られた神輿の特徴を備えています。それは、屋根の大きさが台輪より大きく、勾配がゆるやかである点に見られます。

六崎区の神輿は、昭和60年（1985）10月に修理が行われましたが、古い神輿の様式を今日まで良く伝えています。

103

おおたごんげん
太田権現

太田（元禄期以前までは大和田村といった）にある熊野神社は「太田の権現様」といわれています。『佐倉風土記』は、150年前（戦国時代）、紀州熊野参詣の村人が帰ろうとすると、桃核ほどの青石が草鞋についていた。捨てようとしてもつくので、怪しんで袋に入れたが日々大きく重くなるように感じる。家に帰ると袋に入らない。そこで太田権現として祀った。『古今佐倉真佐子』は、大豆ほどの青石が草鞋に入り足が痛む。取り捨てても入るため美濃紙に包み笠に結んで持参した。ある夜、名主が早々と村の鎮守としないと祟ってひとりも生かしてはおかないとこの石の告げる夢を見た。名主は肝をつぶし翌朝村人に尋ねると石が放置されていたので、祠・鳥居などを建立し鎮守とすると不思議と色々な願いが叶った。年を過ぎると石は成長し祠の屋根を突き破って３尺ばかり出た。その形は陰茎のようであると記しています。

太田権現に奉納されていた石棒と木製棒は、明治維新の淫祀邪神廃棄の影響で、佐倉屯所（警察署）が３日間かけて焼却しました。しかし、子授けの霊験があるとして現在も信仰を集めています。祈願成就の際には陰茎を模して奉納する習わしで、本堂裏の小屋に石棒と木製棒が多数奉納されています。

104

くまのじんじゃいたえま　りゅうず
熊野神社板絵馬「龍図」

この絵馬は太田（おおた）の熊野神社本殿に掲げられているもので、縦77cm、横138.5cmを測ります。その由来については明らかではありませんが、黒沼槐山（くろぬまかいざん）（隆三）の手により三枚板の額面いっぱいに墨で力強く巨龍が画きあげられており、二つの書き印にも雅趣があります。

槐山は佐倉藩主堀田正睦に仕え、藩御用絵師として活躍し、安政（あんせい）３年（1856）に「蝦夷地地理絵師御用」で藩命によりカラフト方面まで出向き、地図の作成にも当たっています。また印旛沼の鯉を描いたことでその名を高め、市内にも鯉の屏風が残っています。

なお洋画家の浅井忠は８才の時に槐山に師事したと伝えられています。

105

じょうじょうあと
城城跡

城にあるこの城跡は、JR佐倉駅の南東約1.5kmにあります。この地は、中世には印東荘六崎郷の一部でした。「香取造営料足納帳」によると、六崎郷は15世紀初頭の応永年間（1394～1428）には六崎氏が領していました。「城」の地名は、この城跡のある台地の奥にある浄土宗円城寺、もしくは千葉氏の有力な一族円城寺氏に因むものと言われています。

城の中心部は、堀切によって台地から独立し、土橋（どばし）から出入りするようになっています。敵がこの土橋から城内に侵入しようとすると、城内に聳え立つ土塁から攻撃されるような造りになっています。また、この南から東にかけて、幾段の細い平坦地があり、城中心部の防御を補っています。また、南西部の谷には、千葉氏家臣であり円城寺の檀家であった深山氏が居住していたという伝承があります。

この城跡の南には、城に侵入する敵を、脇の高台から攻撃する施設がある金部田城跡があります。

106

こしのづかじょうあと
小篠塚城跡

小篠塚にあるこの城跡は、JR佐倉駅の南方約3.5kmの鹿島川右岸の台地上にあります。台地先端部の西側に、この城において一番広い平坦地があり、ここがこの城の中心部となります。土塁がほぼ全周し、東にある出入り口は侵入する敵を脇から攻撃できるようになっています。この他の部分は、堀や土塁によって３つの区画に分かれています。まず土塁が巡らされている方形の区画が、城の中心部の東側に２つ並んでいます。さらに、この２つの区画のの北側に、城の中心部を防御している巨大な土塁の続きによって区画されている平坦地があります。

この城跡に関する史料は残されていませんが、平安時代から鎌倉時代の初めには、この地域を印東氏が領していました。14世紀末には、この地を平河氏と宍倉氏がこの周辺を知行しており、戦国時代には古河公方足利成氏が、一時期在城したこともあったようです。

107

しょうにんづかこふん
上人塚古墳

小篠塚（こしのづか）にある上人塚古墳は鹿島川を眼下に望む標高32mほどの台地縁辺に位置する古墳です。北側と東側の一部分が削平されていますが、よく整った方形を呈し、１辺22.6m、高さ3.5mを測る市内でも有数の方墳（ほうふん）です。

未調査のため、埋葬施設や副葬品については明らかではありませんが、占地状況及び形態から古墳時代終末期（７世紀代）の所産と推定されています。この古墳の南西側には直径８mほどの円墳も存在しています。

アラク台と呼ばれる周辺の台地は、土師器、須恵器の散布する包蔵地として知られており、当時の墓制である古墳と集落の関係がどのようなものであったか興味深いところです。

印旛沼開発の歩み

豊かな水をたたえる印旛沼。現在では一部が干拓されており、北沼と西沼とに分かれています。このようになるまでは、江戸時代以来多くの人々の努力がありました。

江戸時代の印旛沼は多くの恵みを人々に与えていましたが、その反面、大雨の際の氾濫で周辺地域の人々に多大な被害も与えていました。

そのため幕府は、享保（1716～1736）、天明（1781～1789）、天保（1830～1844）の各時期に工事を実施しました。この工事は、水害から土地を守るという目的のほかに、水運の便を図るといった目的がありました。しかし、工事はどの時期においても困難を極め、結局は失敗に終わりました。

明治時代以降も工事は進められますが、結局完成するのは、昭和43年（1968）で、実に２世紀以上にもわたる大事業でした。